異動になった先でペアになった部長にえっちなおもちゃでクリ責めクンニされて連続絶頂＆恋に落ちる話

一、えっちな噂がある部署に部署異動!?　部長とペアになって大人のおもちゃを試さなくちゃいけないなんて聞いてない！

　その部署異動は、突然で、そして時期もおかしなものだった。
「わ、私が五課に異動ですか……!? ど、どうして……っ」
　出社早々に上司に呼び出された斎藤みゆきは、そこで告げられた突然の辞令に困惑気に声を上げた。何度書類を見ても、書いてあることは変わらない。
「斎藤さん、突然で悪いけど、うちじゃどうにもできない辞令だからさ。今日付での異動だから、デスクの上片付け終わったらすぐ上行ってくれる？」
「そ、そんな……」
「悪い話じゃないと思うよ？　あそこはうちより業績良いから給料だって上がるし」
「そんな問題じゃ……」
「とにかく、辞令は辞令。まっ、頑張ってよ」
　話は終わりだとばかりに、まだ付いていけていないこちらを置いて上司が部屋から出ていく。

（そんな……五課って……）
　手元の書類を再度確認して呆然とする。
　営業五課。そこはこの会社で業績トップを直走る、大人のおもちゃを開発販売する部署だった。
　日本というこの国で、性産業は根強く力を伸ばし続けている。新しいおもちゃを開発し、それがネットで評判を得ればまさに飛ぶように売れる。
　この会社は特に、大人のおもちゃ界ではトップに君臨する会社だった。
（五課って、仕事中にえっちなことばっかりしてるっていう噂がすごいのに……）
　仕事内容が内容だからだろう。他の課と一線を画すせいで、五課に対するひどい噂は絶えることがない。
　曰く、毎日酒池肉林騒ぎ。営業先に身体売って数字ゲットしてる。デスクでオナニーパーティーしまくっている。女性社員を犯して、時間内で何回潮吹きさせたかで勝負している。作る製品は社員の性癖が詰まったものだ。などなどなど。
　五課が社長室のすぐ下にあるせいか、社長に贔屓されてる、社長もセックス三昧に参加している、などそれこそ根も葉もない噂ばかりだが、新入社員でもすぐに耳に入るものがたくさん囁かれていた。
　そんな部署に配属された。しかも今日付けで。上司のあの

口ぶりでは、どれほど抗議してももうどうしようもないのだろう。
「うぅ……今日出社したのが間違いだったんだ……」
泣き言を言いながら立ち上がる。どれだけ嫌だろうが、生活していくためには働くしかない。今日付けで辞表を提出するかもしれないとも思いながら、片付けのためにデスクに戻る。五課に配属になったと噂が広まらないうちに、動かなければならなかった。

段ボール箱一つにまとまった荷物を持ち、最上階の一つ下、五課が入っている階へと向かう。異動のための荷物は意外と少なく、だが気持ちが沈んでいるせいでひどく重たく感じた。
ポーンっと音を立ててエレベーターが止まる。この先の廊下を少し歩けば、もうそこは五課の世界だ。
足取り重く廊下を進む。胃のあたりが重く、今にも緊張で吐いてしまいそうだった。
深く息を吐き出し、扉を開ける。肩に力を込めて薄目で扉の先を見やる。さぞ卑猥な様子が広がっているのだろう……。
「あ、れ……？」
そう思って開けた扉の先、見えた光景は元の部署と変わりないものだった。
デスクが並ぶ中、スーツを着た社員がカタカタとキーボー

ドを叩いている。肩にスマホを挟み通話をしている社員もいれば、数人で固まって意見を交換している社員もいる。
「ふ、普通だ……」
　ぱぁっと視界が開けたような感覚だった。段ボールを持ったまま、ぐるりと部署内を見回す。
（そっか！　そうだよね！　大人のおもちゃ売ってようが、普通の会社だもんね！　そんな真っ昼間からえっちなことなんてしてるわけないか！　噂は噂！　あー、よかったぁ）
　脳内で今まで変な噂を囁いてきた同僚や先輩に文句を言いつつ、軽くなった肩から力を抜く。根拠のない噂を信じたのが間違いだったのだ。
「あ、もしかして今日配属された斎藤さん？」
　気持ちが軽くなったところでそう声を掛けられた。
　振り向くと、そこにいたのは体格のいい身体にスーツを身につけた、イケメンと言っていい男性だった。切れ長の目に太めの眉、スッと通った鼻筋に薄めの唇。真っ直ぐにこちらを見つめる視線に、ドキドキと胸が高鳴っていた。
「あ、はい、斎藤みゆきと申します。今日からこちらでお世話になることになりまして」
「うん、聞いてるよ。突然でごめんね。病気で一人営業補佐の子が辞めちゃってさ。あっ、デスクに案内しようか。荷物持つよ」

「わっ、すみません」
　自然な動作で段ボールを取られ、慌てながら後ろに続く。フロアには三十人ほどの社員がいるようだった。
「斎藤さんはここね。で、補佐してもらう営業さんが隣の川崎さん。うちじゃエースの一人だから、困ったら何でも聞くといいよ」
「斎藤みゆきです、よろしくお願いします！」
　川崎さん、と呼ばれた美しい女性が、長く艶やかな髪をさらりと流しながらこちらを見上げた。
「川崎です、よろしくね。今日急に異動になったんだって？」
「あ……はい」
「ごめんねぇ。私は別にもう二、三日くらいなら、補佐なしでもいけたと思うんですけどね、部長？」
　眉を下げ両手を合わせて謝る姿は、見た目の綺麗さを一気に可愛らしい雰囲気にさせる威力を持っていた。
　その優し気な目元が一転キツイものになり、部長、と言いながら隣の男性へと向けられた。
「いやぁ、でもこういうのは早い方が斎藤さんも覚えやすいしさ？」
「だとしても、猶予は必要だと思いますよ」
「ごめんごめん。斎藤さんも、ごめんね？」

「あ、いえ……、辞令は辞令ですし」
　長身を屈めて覗き込んでくる男性に、びくりと肩を揺らしながら首を横に振る。
「そういえば俺まだ自己紹介してなかったね。部長の佐伯琢磨です。君の直属の上司に当たる立場だから、もし何かあれば俺に言ってくれていいからね」
「あ、はい！　よろしくお願いします！」
「うん、よろしく」
　三十代半ばくらいの見た目なのに、もう部長職についているなど、エリートに違いなかった。
　先ほどまでのドキドキは消え、ピリッとした緊張感が身を包む。
「じゃあ仕事内容とかは川崎さんに聞いてね」
「はい。あ、荷物ありがとうございました」
　デスクに段ボールを置いた佐伯が、ひらりと手を振って自分の仕事に戻っていく。
　その後ろ姿に頭を下げ、新しい仕事内容を覚えるために「よし！」と気合を入れた。

　五課に配属されて二週間ほどが経過した。
　売っている物が違うだけで、仕事内容は以前とあまり変わ

らず、そこまで気負うほどのものではなかった。
　担当の川崎との関係も良好で、この二週間フロアで卑猥な行為を見たこともない。売っている物が物なだけに、商品が営業の鞄の中から出てきたり、書類にえっちな単語が書いてあったり、パッケージの卑猥なデザインを見たりすることはあるが、一週間もすれば慣れる。
　今では、なぜあれほど変な噂が流れていたのか不思議なくらいだった。
「斎藤さん、お疲れ」
「あ、佐伯部長、お疲れ様です」
　少し遅れた昼休憩を終え、食事から戻ってきた佐伯が声を掛けてくる。五課は社員同士の風通しが良いようで、こうしてよく声を掛けてもらうことが多かった。
「斎藤さんさ、二週間前に全体チャットに送られてたアンケートってまだ答えてないよね？　締切今日までで さ。出てないの斎藤さんだけなんだよね」
「えっ！　あ、すみませんっ……すぐ確認します」
「最初バタバタしてたからね。俺ももうちょっと早く気づけばよかったんだけど」
　慌ててチャットを確認する。二週間前の履歴まで戻ると、そこには確かに今日締切のアンケートが送られてきていた。
　ＵＲＬをクリックして中身を確認する。

『新商品に対する実地試験および感想　※必ずペアで行うこと』
　タイトルの下には五つの大人のおもちゃが記載されており、どうやらそれらを使ってみての感想と改善点に関するアンケートのようだった。
　ザッと確認している間、背筋に冷や汗が流れるのを感じる。
「あの……、これって……」
「うちの課は、毎月このアンケート答えるの必須なんだよね。社内での評価とかボーナスにも直結してくるからさ。できれば締切破らずに提出してほしいんだけど」
「いえ、あの、それは、はい……」
　何度マウスを動かしても書かれている内容は変わらない。
「これ、その、私が、使うんですか……？」
「もちろん。今回のは全部女性用のおもちゃだからね」
　あっけらかんと告げる佐伯に、ギギギッと錆びついたロボットのように視線を向ける。
「どうしたの、そんな顔青くさせて。……もしかしてやってない？」
　ギシリ、と重く頷くと、佐伯が困ったように眉を下げた。
（だってそんな、えっちなおもちゃ使うなんて、聞いてない……ッ。やっぱりここ、噂通りの場所だったんじゃ……）
　この二週間の生活は幻想だったのだろうか。

青褪めて泣きそうになっていると、隣で話を聞いていた川崎がひょこりと顔を覗かせた。
「というか、斎藤さん、ペアまだ決まってないんじゃない？」
「えっ、そうだったっけ？」
川崎の指摘に、佐伯が驚き「あちゃー」と髪を掻く。
「そっかぁ、そうだよね、ペアまだなら話も聞いてないよね……。あー、どうしようか、いまペアいない子いないもんなあ」
佐伯がフロアをぐるりと見回す。二人の間では話が通じ合っているようだった。
「あの、ペアっていうのは……」
「ああ、このアンケート、毎月あるんだけど、その時に一緒にやる相手のこと。基本同期でペアになってもらって、その二人で製品試してるんだよね。でもそっか、うーん、どうしようか……」
佐伯が難しい顔で悩んでいるが、こちらとしてはそれどころじゃなかった。
（ペ、ペアって、一緒に製品試すって……つまり、一緒にえっちなことするってことでしょ!? むっ、むりむりむりむりっ、そんな、私、プライベートでもしたことないのにッ）
焦る気持ちとは裏腹に、でもこのままいけばペアがいない

からやらなくてすむかも、という気持ちも湧いてくる。
　お願いっ、と心の中で祈っていると、川崎から一つの提案がなされた。
「部長、いまフリーですよね？　部長と斎藤さんがペアになればいいんじゃないですか？」
「へ……」
「俺？　あー、俺はいいけど、年上と組まされるって、斎藤さん嫌じゃない？」
「え、あの、え……」
「私は自分から希望して十以上年上の今のペアと一緒になりましたけど？」
「川崎さんは特殊例じゃん」
「でもほかに人いないですよね？　このままじゃ斎藤さんの人事評価にも影響出ますし」
「あー、そうだよね。さすがに、ね」
「い、いえ、あの、私は……っ」
「じゃあ斎藤さん、俺でごめんけど、よろしくね」
「斎藤さん、部長がペアなら百人力だよ！　今日で一気にあの五つこなすの大変だろうけど、頑張ってね」
「あ、その、はい……」
　二人からの怒涛の勢いに、頑張って断ろうとしていた気力が徐々に萎んでいく。流されるままに頷くしかなかった。

「早速三番室行こうか。アンケート書く時間考えたらあとちょっとしかないよ」
「えっ、今からですか！」
「もちろん。ほら、いるものは俺が持っていくから、早く立って立って」
「頑張ってね〜」
　緩い川崎の応援を背に、佐伯に促されてフロアを出る。
　足は震え、手指は冷え、鳩尾の辺りが痛みを訴えていた。

　三番室と呼ばれる部屋は、五課のフロアの隣にある三つの個室のうちの一つだった。
　初めて入るそこに、佐伯に「どうぞ」と扉を開かれて足取り重く入室する。
「こ、ここ……」
「ラブホみたいって思った？」
「えっ！　あ、いえ、そんな……」
「大丈夫、みんなそう思ってるから」
　左側に大きなベッドが置かれ、右側には大きめの一人掛けソファ、棚にはいくつもの大人のおもちゃが鎮座し、ここが会社のビル内だとは思えない内装をしていた。
「じゃあ設定するから、先服脱いで待ってて」
「えっ、あのっ、本当にするんですか？」

「ん？　うん。どうかした？」
　あまりにも普段通りの佐伯に、こちらが何か間違ったことを言っているのかもしれないという気分になる。
「あ、もしかして服脱ぐとこ見られるの恥ずかしい？　俺こっち向いとくから、その間に脱いじゃって」
「ちがっ、そうじゃなくて……」
　話を聞いているのかいないのか、くるりと後ろを向いた佐伯は、扉付近にあるタッチパネルを操作しだす。
（そんな……佐伯部長の前で服脱ぐなんて、無理に決まってるのに……）
　きょろきょろと見回して逃げ道を探るも、出入り口は佐伯のそばの扉だけ。どう頑張っても逃げられそうになかった。
「あれ、まだ脱いでなかったの？」
「っ、あの、佐伯部長、やっぱり私……」
　胸元のシャツを握りしめて一歩佐伯から遠ざかる。だが佐伯はこちらの心情など知らないとばかりにその距離を詰めてきた。
「どうしたの？　何か不安があるなら言ってくれていいんだよ？」
「っ、わ、私、こんなこと、するつもり、なくて……っ、事務仕事だけのはずじゃないんですか……？」
「他の部署はそうかもしれないけど、五課に配属されたら、

これはみんなやらなくちゃいけないことだね。そのためのペアだし、相応のお給料ももらってるしね」
「そんな……お給料は今まで通りでいいのでっ、私だけ免除してもらうことは、」
「無理だね」
　必死の提案を佐伯がバッサリと切り捨てる。二人の間にあった距離は、いつの間にか手を伸ばせば抱き込まれそうなほどの距離に縮んでいた。
「服、俺に脱がせてほしい？」
　ゆるりと頭を傾けながら訊ねられ、震える息を吐きながら首を横に振る。
「じゃあどうすればいいか、わかるよね」
「ッ、」
　ぎゅっと強く目を瞑って滲む涙を隠す。小刻みに震える指先をボタンに掛け、一つ一つゆっくりと外していく。
「いい子だね。そのまま全部脱いで、大丈夫、ここには俺しかいないから」
　それが嫌なのに。佐伯は視線を外すことなく、服を脱ぐのを見つめてくる。
「っ、ぁ、の、」
「下着も全部脱いでね。その下着も可愛いけど、いまは必要ないから」

「ッ、はぃ……」
　ブラジャーのホックを外し、するりと腕から抜く。現れたおっぱいを佐伯の目から隠すように身体を横に向け、最後の砦にゆっくりと指を掛けた。会社でしてはいけない姿になろうとしている。
　ノロノロとした動きで脱いだ下着を服の下に隠す。おっぱいと股間を腕で覆うだけの、正真正銘生まれたままの姿になってしまった。
「ちゃんと脱げたね、いい子だ。それじゃあ、後ろのそのソファに座ろうか」
　こちらが精一杯の勇気を出して裸になったのに、佐伯は日常の一片だとばかりに軽く告げてくる。女の裸を見るくらい、慣れているのかもしれなかった。
「おっぱい隠さないで、腕は上に、両足は腕置きに引っ掛けるみたいに開いて」
「ッ！　そんなっ、そんな恥ずかしい格好無理です！」
「無理って言われても。言っとくけど、君がこれこなさないと、この部屋から出ることすらできないんだよ？」
「え、どういう……」
「この部屋、指定されてるおもちゃを試してここにレポートを書かないと、扉が開かないシステムになってるんだよ」
「そ、そんな、なんでそんなこと……」

「さあ？　でも効率はいいからね。ほら、腕上にあげて」
　優しいながらも有無を言わせない強さで、腕を背もたれに引っ掛けるように持ち上げられる。
「っ、ぁ、」
　真っ白い肌のおっぱいが晒される。
　だが佐伯はおっぱいには目もくれず、ソファの後ろに周りカチャカチャと何か操作し始めた。
「え、あ、ちょっ、佐伯部長っ！」
「ん、これで良し。君はこうでもしないとスムーズに進みそうにないからね」
　手首を固定するような輪っかに、慌てて腕を動かすも、ガチャンと音が鳴るばかりで自由が効かない。
　焦る姿をよそに、前に戻ってきた佐伯が今度は足を拘束し始めた。
「ゃっ、まってください、部長っ！　やっ、見ないでっ、やだっ、やめてくださっ！」
　片足ずつ、腕置きに引っ掛けるように開かれ、それぞれ膝辺りにバンドを巻いて動かせないようにされる。
　ぱかりと開いた足は、女性の大切な場所を光の元に晒し、佐伯の目にしっかりとその姿が映ってしまっていた。
「やあっ、ゃだっ、見ないでぇ……っ」
　佐伯から顔を隠すように横を向く。

「嫌かもしれないけどさ、俺も早く終わらせるよう頑張るから、君も協力してね」
　あまりの恥ずかしがりようにか、佐伯が困ったようにそう告げる。
（っ、そうだ、私が頑張らないと、佐伯部長もこの部屋から出られないんだ……）
　嫌だ。本当に嫌だ。だけど、やらなければ終われないのだ。
　もう裸も見せたのだ。こんな恥ずかしい格好をして、おっぱいも、おまんこも見せたのだ。これ以上に恥ずかしいことはもうないはずだ。
　いまだに震える身体から、どうにか力を抜いて深呼吸する。
「よ、ろしく、お願いします……」
　か細い声に、佐伯が安堵したように「うん」と頷いた。

「じゃあ早速だけど、まずはこの乳首クリップからね」
　タブレットを確認した佐伯が、横に置いたデスクの上から乳首クリップを一対取りチリンと鈴を鳴らした。
「このクリップはあんまり痛くないやつで、でもその分鈴が先端に付いてるから、感じて身体が揺れるたびにチリンって鳴って羞恥を煽るタイプのおもちゃだね」
　説明しながら佐伯が近づく。晒されたおっぱいはツンっと乳首を勃たせ、いつでも挟んでいいよと言っているかのよう

だった。
「ん、もしかして寒い？　もう勃ってるね」
「っ、すみませ、」
「怒ってないよ。逆にありがたいくらいだ。じゃあ付けるからね」
　クリップは優しく乳首を挟んで、横のネジをくるくると回して強さを調節するタイプだった。
　佐伯の指がくるくるとネジを回し、乳首をきゅっと挟んでくる。
「んっ！　ぁっ、鈴が……ッ」
　乳首に指が触れ、びくりと身体が揺れる。その動きに合わせて鈴がチリンっと鳴った。
「ふふ、いい音だと思わないかい？　こっちも付けようね」
「っ、ぁ、りょうっ、ほう……んっ」
　反対の乳首にもクリップが装着される。小さいながらもチリン、チリンと涼やかな音を立てるそれは、こちらの羞恥をどんどん煽ってくるようだった。
「乳首が小さめだから、あんまり動きすぎると取れちゃうかもしれないね」
「っ、すみませっ、ぁ……音っ、ゃだっ」
「この鈴もいろいろ考えててさ。音もそうだけど、大きさとか形とか。女の子はおしゃれな方が好きでしょ？　だから鈴

の形を猫にしたり犬にしたり。大きさも、乳首が大きな子はこれじゃ物足りないだろうからね」
　これ、と言いながら佐伯が鈴をトンっと揺らす。涼やかな音とともに乳首に振動が伝わり、鼻から「んっ♡」と甘い息が漏れてしまった。
「じゃあ次は、っと……次はクリリングだね。クリトリスは……あー、こっちも小さめか。しかも皮被ってる」
「やっ、ぁっ、見ちゃっ、だめで……ッ、んっ」
　佐伯が開いた足の間にしゃがみ込み、ふにりと柔らかな陰唇に触れてクリトリスを確認してきた。あらぬところに感じる視線に、羞恥で身体が震える。
「んゃっ、クリっ、触っちゃ……ゃっ！」
「クリの包皮、剥いたことない？　オナニーとかってしてる？」
　包皮越しにクリに触りながら佐伯が訊ねてくる。その視線はクリとタブレットを交互に見ていて、何かのファイルを探しているようだった。
「あれ、君最初のアンケートにも答えてないんだ。あー、じゃあ一緒にやった方がいいな」
「ん、んぅっ、ぁ、な、に……？　やっ、クリっ、ぎゅってしちゃっ、だめぇ♡」
「だめって声してないよ。うちに配属された時に必須のアン

ケートがあるんだけど、それも答えれてなかったから一緒にやるね。クリももうちょっとおっきくしないとリング嵌めれないからさ」
　クリを大きくさせようときゅっきゅっと刺激しながら、佐伯がタブレットを操作する。片手間の動きに見えるのに、その指から与えられる快感は大きなものだった。
「まずは、セックスはしたことある？　処女？」
「っ、なんっで、そんなっ、こと……ぁっ、ん」
「大事なことだよ。これから先おもちゃの試験をするのに、性経験のあるなしは製品の性能に関わってくるからね。したことある？　それともない？」
「ひぁっ……っ、ぁ、ない、です……っ、ない、からっ、クリっ、もっと優しく……んっ」
「ああ、ごめん、強くなっちゃってたね。お詫びに先端カリカリって引っ掻いてあげる」
「んぁああ♡　っ、ひっ、ぁあっ、ゃっ、かりかりっ、だめっ……んっ、ぅう」
　包皮に隠れた先端を佐伯の指がカリ、カリ、と優しく引っ掻いてくる。その敏感な箇所への直接的な刺激に、慣れていない身体はあっという間に絶頂の手前まで押し上げられた。
「次の質問ね、オナニーは週に何回してる？」
「ぉ、おなにー……？　し、しらなっ、そんなっ、いわなっ

……んぁ！　ごめっなさ、言う！　いいますっから、ッ、クリ強いのっ、だめ……っ♡」
「もう一回聞くね。オナニーは週に何回してる？　嘘ついたら、無理やりクリの皮剥くからね」
「ぁ、ぁ、ごめ、なさ……、オナニー、二回してます……っ、金曜と、土曜の夜に、してます……んっぅ、ぅ」
　佐伯の本気の目に、涙を流しながら答える。
「そう。どうやってしてるの？　おもちゃは使う？」
「っ、つかってない、です……ん、クリ、をっ、皮の上から、きゅっきゅって、いじって……ぇっ♡　ぁ、あっ、それっ、んっ、そうやって、ぇ、おなにー、してます……ぅ」
　告げた通りにクリを皮の上から弄られる。自分の手とは違って強いその刺激に、身体が一気に張り詰めた。
「っあ、だめっ、イくっ、イっちゃ……っ、ぃ――ぐ、ぅ……っっ♡」
　パチンと目の前が弾ける。腰を突き出して絶頂すると、佐伯が驚いたように一瞬動きを止めた。
「え、これでイったの？　……もしかして雑魚クリ？」
「ゃ、あっ、今くりくりっ、しちゃ、だめ……ぇっっ、ぁ、はっ……ぁ」
　止まっていた指がすぐに動き出す。陰唇の間から蜜が溢れてきて、それを纏わせた指がにゅるにゅるっとクリをいじめ

てくる。
「んんぅっ、らめっ、もっ、いまっ……イきましたっ、イったからっ、ゆび、とめてくださっ……んぅうっ！」
「こんな雑魚クリだと、今後が心配だなぁ。そうやって皮オナばっかりしてるからこんなことになるんだよ。クリはこうやって剥いて、しっかり全体をいじめないと弱くなっちゃうからね」
「ひぁあ♡　やっ、皮むいちゃっ……っ、ひどっ、ぃ、むかないって、言ったら剥かないって、言ったのにぃ……ぁああっ、ひぅっ、ぅ、クリやらっ、だしゃないでぇ……♡」
　愛液の滑りを借りて、佐伯の指がにゅるんっと包皮を引っ張り上げる。普段弱々オナニーで甘やかされてばかりのクリは、初めての皮剥きに必死に抵抗しているようだった。
　だが佐伯の巧みな手管には敵わない。観念したように出てきたクリは、ぷりゅんっとその全体を曝け出した。
「ひっ、ぁあ♡　でちゃったっ、わたしの、クリっ、むかれちゃったぁ……ひっ、ぁ、あ」
「君、ちゃんとクリ洗ってないでしょ。恥垢がこびりついちゃってるよ。お掃除してあげるから、今日の夜からはちゃんと自分で皮剥いて、シャワーで優しく洗うんだよ」
「っ、やっ、はずかし……ッ、みないでっ、見ちゃだめで……んぅうっ！」

佐伯が横のテーブルにあった綿棒を何かの液体に浸す。その液体は薄っすらピンク色に染まり、粘度の高そうな見た目をしていた。
「これが二つ目の製品。まあなんとなく分かってると思うけど、体感してみるのが早いから」
そう告げて、たっぷりと液体を含んだ綿棒をクリにぎゅっと押し当てられた。そのまま恥垢を取るようにくるくると回される。凸凹のついた綿棒はその段差を利用しながら恥垢をくっつけ、そして敏感なクリを刺激してくる。
「ひっ、ぁっ、おそうじっされちゃってぅ……っ、ごめっ、なさっ、ゃあっ、アッ⁉ っ、なにっ、あつぃっ、ゃらっ、クリ熱いっ！　とめてっ、ぶちょぉっ、クリっ、もっ、とめて……ぇっ♡」
「この根本とかも、ほら、べっとり付いてる。ここもちゃんと掃除しないとね」
「ゃあっ！　やらっ、これなにっ、おかし、ぃからっ……ッ、ンァあ、しょこっ、やらっ、そこ弱いっ、んぅぅっ、熱いのっ、止まらなっ……っ、んぅぅ」
必死に首を横に振るのを知らないとばかりに、綿棒を新しくしてまたくるくるとクリに押し当ててくる。綺麗になったクリはどんどん敏感さを増し、裏筋をツーっと撫でられるとまた簡単にイってしまう。

「ごめっ、なさっ、またイっ、ぐぅぅ――ッ！　ッッ、ぁああっ、ごめんなさっ、またイきましたっ、イっだ！　イっだ、がらぁ……♡」
「本当雑魚クリだねぇ。今回のこれも初心者向けの、ジョークグッズとしての媚薬だよ？　クリもパンッパンに膨れてるし。まだあと三つ製品残ってるって分かってるのかなぁ」
　ピンっと少し怒ったようにクリを弾かれる。その衝撃に「ぉほっ♡」と鼻の下が伸び、また甘イきししてしまった。
「またイった。イくときはちゃんと報告しないと。……まあクリも及第点の大きさになったし、これで次いけるね。次はこのクリリング、クリの根元に嵌めてクリを虐めやすく敏感にするものなんだけど……君、耐え切れるかなぁ」
　そう心配気に言いながら、佐伯の指がクリを摘み、その根元にクリリングを装着する。
　きゅっと根元を締め付けるそれは、違和感こそないものの、先端にどんどん血が集結しているのが伝わってきた。
「ぁっ、ぁああっ、ゃらっ、これっ、んぅぅっ、クリっ、おっきくなっちゃっ……んぅっ」
「君のはまだまだ小さい方だって。これからもっと大きくしていかないといけないんだから」
　涙の浮かぶ目でそろっと股の間を見る。ふわっとした陰毛の間から、ぴょこりと顔を出す真っ赤なクリが見え隠れして

いた。
　ぷるぷると震えるそのクリに、はぁはぁと呼吸が荒くなる。嫌なはずなのに、おまんこからはとろりとした愛液が溢れ続けていた。
「次はっと……あー、これか。……気絶しないでね？　まあしても続けるんだけど」
「っ、なん、ですか……それ、んっ」
「クリバイブ、クリ専用のバイブだよ」
　長い棒の先端に、小指大くらいの大きさの楕円形のものが付いており、佐伯がスイッチを押すとその先端がブブブっと動き出した。
「ひっ！　ゃっ、そんなのっ、むりですっ、いまクリ敏感でっ……！」
「だからやるんでしょ。最初は弱でやってあげるから、改善点とかあったらちゃんと言うこと」
「ゃらっ、やっ、だめ……んぅぅ――っ♡」
　バイブを押し当てられた瞬間、びくんっと身体が跳ねた。それに合わせて一際大きく乳首の鈴が鳴り響く。
　ブブブっと激しく振動するバイブは、的確にクリを揺さぶり、佐伯が弱いところを見極めるように動かすせいで叫ばずにはいられないほどの快感が襲いかかってきた。
「ひぁあああ♡　らめっ、らめイぐっ、イ――っ、ぐぅぅ

……ッ！　っっ、っまだっ、イぐっ、イぎま……しゅっ、ゃらっ、とめてっ、バイブ、とめて……ぇっ、んぅぅっ、ちゅよぃっ、ばいぶっ、ちゅよいからぁ……んぁああ！」
「これ弱だって、ほら裏筋のここ当てられるの弱いでしょ。こら、腰動かして快感逃さない。根本のここも、ほらまたイった。真っ赤に腫れて、もっともっとって言ってるのに、こんなんで簡単にイっちゃうんだから」
「ひっ、ぐぅぅ……ッ、ぁああっ、まだっ、イぎま、っしゅっ、イぐっ、がらぁ……ッ♡」
「どうぞ、どうせ駄目って言ってもイくんでしょ」
「ごめっ、らさぃっ……イっ、ぐ、ぅ――ッッ！」
　腰をのけ反らせて絶頂する。何度絶頂してもバイブは止まらず、佐伯がいじめる動きも止まらない。
　顔を真っ赤にさせ、涙も涎も垂らし、拘束具をガチャガチャと揺さぶって、抱えきれない快感に翻弄されて絶頂する。
「ぉっ、ぉおっ、ごっ……ぉっ、ひゅっ、ぅっ、ぉほっ♡」
「うわ、中ぎちぎち。こっちはあんまり弄ってない感じ？」
　じゅぷんっと音を立てて指が一本中に挿入される。バイブは変わらずクリの根元を揺さぶり、増える快感にいやいやと必死に首を振る。
「うーん、やっぱりＧスポの反応悪いね。クリオナばっかりしてるからだよ。こっちもちゃんと気持ちいい場所なんだっ

て覚えようね」
「ひっ、ぅ、しゅみ、ましぇ……ぁあっ、ゃらっ、クリっ、も、とめて……ぇっ、だめっ、またイっ……っ」
　Ｇスポットを指の腹で擦られ、クリと快感を連動させるように覚えこまされる。
　ここが弱いんだぞ、と。気持ちいい場所なんだぞ、ここだけでイけるようになれ、と。そう教え込まれる。
「愛液の量は十分だね。ちょっと多いくらいだ」
　じゅぷじゅぷと音を立てながら指が抜き差しされる。とろとろに溢れる愛液はソファを濡らし、冷えたそれがお尻に冷たいくらいだった。
　指が二本に増える。鍵状にした指がＧスポットを抉りながら抜け、そして強く押し込みながら入ってくる。バイブをクリの根元に押し付けられると、そこから陰核脚、そしてＧスポットにまで振動が響き、叫び出したくなる快感が身体中を駆け巡る。
「イっ、ぐ！　まだっ、イぐっ、がらぁ……ッっ、やらっ、とめてっ！　クリもっ、おまんこもっ、もっ、とめてぇ……っ！　おねがっ、おねがぃっ、じまずっ！」
「ちょっとうるさいよ。喘ぐのはいいけど、あんまり嫌々言うなら猿轡噛ませるからね」
「ふっ、うぅぅ……ごめっ、なさっ、でも、きついんですっ、

おまんこもっ、クリも、きつくて……っ、も、イきたくないんですっ、ごめんなさっ、ぁ」
　ずびずびと鼻を啜り涙を流しながら懇願する。
　今日初めてお外に顔を出したクリは真っ赤に腫れ、根元を締め付けれているせいで可哀想なくらいに充血していた。
「はぁ、仕方ないなぁ。じゃあクリバイブは終わりね。あとでレポート書くときにどんな感覚だったのかちゃんと書くんだよ」
「はぃ……ん、すみません……」
　呆れたようなため息をつきながら、佐伯がクリバイブを止める。ようやく離れたクリへの刺激に、連続絶頂で強張っていた身体からホッと力が抜けた。
「あ、次が最後か。これ終わらせてレポート書いたらここから出られるからね」
「ん、はい……お願い、します」
　佐伯に優しく頬を撫でられ、酷いことをしてくるのは佐伯なのに、その仕草と声音につい甘えるように擦り寄ってしまう。
「最後はこれ、Ｇスポット用のバイブ。君のまんこまだキツキツだけど、これなら入るでしょ」
　ほら、と見せられたのは挿入用のバイブにしては小さめの製品。カーブを描くような形をしているそれは、挿入すれば

Ｇスポットを狙い撃ちできるのだろう。
「まんこドロドロだからローションはいらないね」
　割れ目にバイブを擦り付け、溢れる愛液を纏わせる。そのままゆっくりと蜜壺の中に挿入され、佐伯の言葉通り、ローションなしでもにゅるんっと中まで入ってきた。
「んぁっ、は……っ、んっ」
「スイッチ入れるよ。君はＧスポそこまで感じないみたいだから大丈夫だと思うけど」
　カチリ、とスイッチが入れられ、ブルブルっとＧスポットに嵌った先端が震え出した。
「んんっ、ぅ、ん……ふっ、んっ、ぁっ、ぁ」
　震える吐息に甘い鼻声が混じる。自分でもあまり弄らないＧスポットは快感に鈍く、バイブを当てられても感じすぎるということはなかった。
「中どんな感じ？　ちゃんと当たってる？」
「んっ、はいっ、ちゃんと、当たって……んっ、中、ぶるぶるって、なってます……っ、ぁ、振動、が、クリにもっ、ひびぃてっ、んぅ」
「ようやく試験っぽくなってきたね。他のもそういう感じで報告してほしかったんだけどなぁ」
　タブレットを操作しながら佐伯がぼやく。
「これでイけそうな感じはある？」

「ん、ぅ、わからなっ、ぃ、ですっ、わたしっ、中でイったこと、なくて……」
「あーそっか、じゃあ難しいか……。んー、これでイけるようになるまでやってみるか」
「え、あっ！　急にっ、強くしたら……んんっ♡」
　大きくも緩やかな動きだったバイブが、急にブブブっと細かく激しい動きに変わる。Gスポットを的確に揺さぶる刺激に、ドッと身体中から汗が吹き出たのが分かった。
「はっ、ぁ……あっ、だめっ、だめっ、です、これ……んっ、はっ、やだっ、とめてっ、とめてくださっ」
「お、反応変わったな。もう少し時間掛かるかと思ってたけど、君が敏感すぎるのか、これが優秀なのか」
「ぁ、あっ、やだっ、だめっ、きちゃう……っ、イっちゃう、からっ、やだっ、とめてっ、ぶちょっぉ、んぅっ」
　外に出ている部分を佐伯がトントンと叩く。
　クリを責められている時のような鋭すぎる、一気に快感の縁に押し上げられるような絶頂ではなく、重く、お腹の中に溜まっていくような快感だった。
　太ももに力が籠る。食いしばった歯の間から荒い息が漏れ、逃げたいと暴れるように腕がガチャガチャと音を立てていた。
「んん〜〜っ、やだっ、やだっぁ……ッ、だめっ、イくっ、イっ――……ッ♡」

　ぎゅっとできる限り身体を丸めてイく。膣内が強くバイブを締め付け、イったばかりの内壁でより敏感にバイブの動きを感じ取ってしまう。
「ひゃあっ♡　やっ、いまイった！　いまイったから、バイブっ、んぅぅっ、とめっ、とめてくださっ、やだっ、またイっちゃっ、いくっ、イくっ、からぁ――ッ、ッッ、」
「そのまま十回くらいイこっか。中でイく感覚覚えるの大事だからね」
「やぁあっ、やだっ、とめっ、んぅぅっ、いじっ、わるっ、どうしてっ……やだっ、さえきっ、ぶちょっ……、んぅっ、イっ……ぐっ、ぅ」
　チリンチリンと忘れた頃に鈴の音が耳に届く。感じて跳ねるたびに甲高く鳴り響き、さっきからうるさいくらいだった。
「ひどいなあ。俺は君を思って言ってあげてるのに。中イきを覚えておくのは、おもちゃの実地試験のためだけじゃなくて、女性としても良いことばっかりなんだよ？　なのにそんなこと言われるなんて、ちょっと傷付いちゃったよ」
　そう嘯きながら佐伯の指がスイッチに掛かる。かちっと小さな音が鳴り、途端にバイブの動きがランダムに変化した。
「ひっ、ぁ、やっ、なにっ、やだ……んぅぅっ、ごめ……なさっ、ぶちょっ、ごめんなさぃ、もう言わなっ、意地悪って、言わないっ、ですから、とめてっ……バイブっ、ぬいてくだ

さ、んぅぅ！」
　ドンドンと上へと叩きつけるような動きや、左右への振動に加え、Ｇスポットを押し潰したまま強く、弱く、バイブが動き続ける。刺激に慣れさせないためか、変化するリズムも違っていた。
「クリも寂しそうだから、こっちも使ってあげようか。これの感想まだ聞いてなかった気がするし」
「ひぁああ♡　やだっ、りょうほ、だめぇ……ッ、ぃ――ぐぅぅ♡　ッッ、ぁっ、がはっ、ぁあっ！」
　話を聞いているのかいないのか、横に置いていたクリバイブをまた持ち出して佐伯がクリに当ててくる。
　中からと外から、違う刺激ながらも強い振動で揺さぶられ、身体は簡単に絶頂へと駆け上った。
「んっ、んぅぅっ、ん〜〜……ッ！」
　びくんっと背を反らせて絶頂する。浮いた腰はなかなか戻って来ず、だが機械はイったことなど知らず暴れ続ける。
「ひっ、ぐっ……っ、またっ、イぐ……っ、――……ッ、ッッ♡」
　敏感な中とクリを、機械特有の無遠慮さでいじめ抜かれる。
　その様子を佐伯は楽しそうに観察し、時折タブレットに何か書き込んでいた。
「ぁっ、ぁ……やらっ、もっ、イきたくなっ、ゃあっ、クリ、

はなしてっ、おねが……クリもっ、いたいからぁ……っ！」
「十回イってって言ったでしょ。ほらあと一回。クリは止めてあげるから、ちゃんと中イきするんだよ」
　クリバイブが外される。痛いくらいの刺激はなくなったものの、Ｇスポットを揺さぶるバイブはそのままだった。
「はっ、ぁ、ぁっ、イくっ、イぎっますっ……っ、中イきっ、します、ぅ……」
「どうぞ。思いっきりイっていいよ」
　にっこりと微笑んだ佐伯が目を合わせてくる。その瞳の中にはぐちゃぐちゃに顔を歪めて泣き叫ぶ己の顔があって、そんな様子を観察されていることにも興奮してしまった。
　身体が絶頂のために力を込める。太ももの筋が浮き立ち、つま先はぎゅっと丸まっていた。
「ひっ、イぐっ、らめっ、も、ぃ、ぐぅ――……ッ♡　っ、ひゅっ、ぅっ、ぁっ、が……ッ！」
　大きくのけ反って絶頂する。今までで一番の絶頂感に目の前がパチパチと弾け、数秒呼吸が止まる。あまりの膣圧にバイブがにゅるんっと飛び出してしまった。
「おっと、まんこの痙攣やばいな。そんなに気持ちよかったの？」
　抜け出たバイブを掴み、佐伯が揶揄うように告げる。だがまだ絶頂の中にいるせいでその声は聞こえなかった。

「ぁっ、ぁ……うっ、ぁっ、もっ、らめ……むぃっ、も、イけな……っ」
　クリに佐伯の指が触れ、いやいやと首を横に振る。
「もう終わりだって。クリリング外さないときついの君の方だよ？」
　パンパンに腫れたクリからリングが外される。皮から飛び出したクリはなかなか元に戻らず、これでは下着を履くのさえ難儀しそうなほどだった。
　乳首のクリップも外され、ソファに拘束されていた腕と足も解放される。同じ体勢でいたせいか手足は痺れ、連続絶頂のせいで全身が重だるい。
　ベッドの上から佐伯がタオルケットを持ってきてくれた。今更だと思いながら敏感なままの身体をタオルケットで包み落ち着くのを待つ。
「締め切りまであと三十分もないな。さっさとレポート終わらせてここから出ようか」
　目の前に椅子を用意した佐伯が、タブレットを操作する。目の前に差し出された画面には、佐伯から見たおもちゃの良し悪しとこちらの反応が書かれていた。
「これ読んで、何か追加したいこととかあったら言って。君の気持ちよさそうだった反応とかは全部記載したつもりだけど、実はこうだったとか、もっとこうだったら良かったとか、

あるかもだから」
「っ……、はい」
　終わったと思ったのに、まだ終わっていなかった。
　なんという羞恥の時間だろうか。
　冷静な佐伯の視点から書かれたレポートには、己の痴態が余すとこなく記載されていて、その羅列を読むのも一苦労だった。
「どう？　なんかある？」
「いえ……これで十分だと思います」
「そ？　ならこれで提出しようか」
「お願いします……」
　タタっとタブレットの画面を押す佐伯から、真っ赤になった顔を逸らす。
　何度も絶頂した様子を文字に起こされたせいで、その様子がありありと脳内で再現されてしまう。
「よし、終わり！　君も落ち着いたら服着て戻ろっか」
「ぅ……はい」
　立ち上がった佐伯はどこまで冷静なままで、先ほどのピンクに染まった時間などなかったかのようだった。
「……佐伯部長は、慣れてるんですね」
　着替えながら、ついぽろっと非難のような言葉が漏れてしまう。

二人きりの空間では、小さな声でも佐伯に届く。扉横のタッチパネルを操作していた佐伯は、その言葉に肩をすくめて振り返った。
「まあ、十年以上ここで働いてるからね。ペアになったのは君だけじゃないし。ほら、扉開いたよ」
「ぁ、そう、ですよね……」
さらっと告げられた内容に、なぜか胸の辺りが重くなる。
どうにか服を着るも、何度も絶頂した身体は敏感なまま。
「どうぞ」と扉を開けて促す、いつも通りの佐伯との差がより心に響くようだった。

二、ペアとの仲を確認するために、セックスしないと出られない部屋に入ることになって……!?

金曜日のランチは外で、という他部署にはないルールが五課には存在していた。そのための手当も別にあり、お金が出るならまあいいか、という気持ちで皆ルール通りに外で昼食を食べていた。
「えっ、川崎さんのペアって主任なんですか？」
補佐についている川崎と二人で来ていた近くのカフェで、暴露された内容に目を見開き驚く。
「あれ、言ってなかったけ？」
「き、聞いてないです聞いてないです！　え、でも川崎さん、以前自分から相手にお願いしてペアになったって」
「そう。入社の時に一目惚れしてね。どうしてもって人事に掛け合って五課所属にしてもらったの。そこからペアになってもらうのにも時間掛かってね〜」
懐かしい、と微笑む川崎に、こちらは開いた口が塞がらない。
川崎のペアである主任は、今年四十五歳を迎える五課のベテランで、川崎とは十五歳ほど年齢が離れているはずだった。
「最初の頃は、同世代の子とペアになった方がなにかと楽だ

から、って相手にされなくて。それでも必死に、貴方がいいんですって言い続けて。他の人をペアにって話も出たけど全部断って、それで成績出せずに異動させられたら意味ないからさ、一人で必死に頑張って……。一年経った頃かな、諦めていいよって言ってくれてね」
　当時を思い出してるのだろうか。川崎がふわりと可愛らしく笑う。
「嬉しかったなぁ。……でもね、私歴十五年のベテランのテクニック、舐めてたの」
　川崎が声を潜ませる。グイッと身を乗り出す川崎にならって顔を近づけると、ほんのりと頬が赤くなっているのが見えた。
「それまで一人でやってたってのもあるけど、初めてペアで実地試験するってなった時、私感じすぎて失神しちゃって」
「えっ、そ、そんなに、ですか……」
　思わず口を手で覆うと、川崎が重々しく頷いた。
「これでも一応一年目から成績残してて、結構慣れてる方だと思ってたんだけどね。あの人の手に掛かれば赤子の手を捻るも同然だったらしくて。こんなので、今までの営業先に失礼なかったか心配だよって怒られちゃった」
「あ、あの、主任が、そんな……」
　仕事内容的にあまり接する機会のない主任は、こちらの目

から見てもいつも穏和で、にっこり微笑んでいる印象の人でしかなかった。
「まああの人に鍛えられたおかげで、こうして営業のトップ張れてるんだけどね」
　ふふっと左手で口元を覆って笑う川崎の薬指には、きらりと光る指輪があった。
「あの、ずっと気になってたんですけど、川崎さんの旦那さんって……」
「ん？　ふふ、私とあの人、プライベートでも仲良くしてるの」
　パチンと長い睫毛の瞳がウインクする。照れながらもどこか自慢気なその様子に、胸の奥がむずりとむず痒くなった。
「おかげで来週のペア試験も、無事に通過できそうよ」
「ペア試験、ですか……？」
　新たに出てきた単語に首を傾げる。
「あれ、さっき届いたメールまだ読んでない？」
「休憩入るまで電話に時間取られちゃってて」
　なかなか終わらない電話に焦っていたのを横目に気付いていたのか、ああ、と川崎が頷く。
「ペア試験って言うのは、まあ簡単に言うとペアの仲が上手くいってるかどうか確認する試験のことね。これを通過できないと、ペアを解消することになるの」

「あ、そういうの、ちゃんとあるんですね……」
「まあ今まで解消されたペアはほぼいないけどね」
「試験って、何するんですか？」
　面談のように、上司と一対一で話すのだろうか。
　そう考えていると、川崎が指先でチョイチョイっと耳を貸すように合図してきた。
　元に戻していた体勢をまた前のめりにさせる。向こうも近づいたのか、耳朶にふぅっと川崎の吐息が当たった。
「――セックス、するの」
「えっ！」
「わっ、斎藤さん声大きい」
「っ、す、すみませんっ」
　思った以上に大きな声が出て、川崎にも、そして声に驚いてこちらを向く他のお客さんにも頭を下げる。
「あ、あの、でも、せ、……くす、って、えっ」
　注目が逸れたのを確認し、慌てて川崎に視線を戻して問う。
「それが一番効率的なのよ。セックスできる相手なら、相性悪いわけではないでしょ？」
「そっ、そういう、ものなんですか……？」
　そんなわけない、とは処女の口からは言えなかった。
「あの……回避することは」
「無理ね。やらないってなったらペナルティで二人とも減給、

ボーナスもゼロになるんじゃなかったかしら」
「そ、そんな……」
　自分だけがペナルティを負うのならまだしも、相手――佐伯もとなると、拒否はできそうもない。
「その試験って、どうやって判定するんですか？　二人で、してるときの、誰かが見てるとかですか？」
「まさか。今はＡＩが判定してくれるのよ」
「ＡＩ……そんな使い方しちゃうんですね……」
　テクノロジーの使い方として良いのか悪いのか。だが誰かに行為を見られて判定されるというのも嫌だ。ならば機械の力を使った方が不満も少ないのかもしれなかった。
「まっ、来週のペア試験、お互い頑張りましょうね」
「は、はぃ……」
　にっこり笑って何でもないかのように言う川崎に、ははは と曖昧に笑うしかできなかった。

　嫌なことほど早くやってくるとはよく言ったもので、あっという間にペア試験の週がやってきた。
「斎藤さん、このあと時間ある？」
　佐伯から話しかけられ、手を止める。見上げた佐伯は出先から帰ってきたばかりのようで、鞄を手に持ったままだった。
「あ、部長……えっと、大丈夫です」

「なら二番室取ってあるから、先そっち行っててくれる？」
　抱えている仕事量を確認し頷くと、スッと佐伯がフロアの出入り口を指差した。え、と戸惑う間もなく佐伯はデスクに荷物を置きに行く。
　一番室から五番室は、いわゆるペアがおもちゃの実地試験をするために使用する部屋であり、そこを予約しているということは――。
「ペア試験、頑張って！」
「あ、やっぱり、そういうことですよね……」
　話を聞いていた川崎が、グッと両手を握って応援してくる。
　先週届いていたメールを読む限り、ペア試験は今週一週間の間に、それぞれの都合がいいタイミングですればいいらしく、特に指定の日や時間はないようだった。
（今週、部長出先の仕事ばっかりだったから、もしかしたらナシになるかもって思ってたのに……）
　そうでなくとも、週末になるのではと思っていたのだが、まさかの月曜日の今日。ノロノロと諦めたように立ち上がりながら、恥もなく泣いてしまいそうだった。
「すみません……ちょっと、行ってきます」
「うん、頑張って～」
　ひらひらと手を振る川崎に頭を下げ、行きたくないと訴える足を無理やり動かす。

ボーナスがないのは嫌だし、減給はもっと嫌だった。
指示された二番室を開ける。中は前回の三番室とほぼ変わらず、部屋の内装を見るだけであの日のことを思い出してしまった。
「っ……、うぅ……」
「あれ、まだ入ってなかったの？」
「っ！　佐伯部長っ！」
部屋の前で足踏みしていると、デスクに荷物を置きにいっていた佐伯が追いついてしまった。
どうぞ、と促され仕方なしに一歩踏み入れる。緊張し固くなるこちらをよそに、佐伯はいつも通り飄々とした様子だった。
ガチャリと二人の後ろで扉が閉まる。ピピっと鳴った音は電子ロックが掛かった音だろうか。これで二人がセックスを終わらせるまで部屋は開かない。
「あ、あの、部長……」
部屋の隅の冷蔵庫からペットボトルを取り出して水を飲む佐伯の、その余裕さを憎みながらおずおずと声を掛ける。
「うん？　どうしたのそんなとこ突っ立って。こっちおいでよ」
「ほ、ほんとに、その、や、やるんですか……？」
お腹の辺りで手をきゅっと組み、乾いた口内を駆使して訊

ねる。これからの行為を想像し、心臓が痛いくらいに脈打っていた。
「そりゃやるよ。君だって、分かっててこの部屋に入ったんでしょ？」
　佐伯が近づいてくる。咄嗟に半歩引いた足は、だがそれ以上動いてはくれなかった。
「顔真っ赤。ここに入ったら何されるのか、ちゃんと分かってるんだよね？」
　佐伯の手が俯いていた顎をそっと上へと引き上げる。
「――俺と君、今からここでセックスするんだよ」
「っ、ぁ」
　囁かれた内容に目元が潤む。躊躇いがちに上げた視線の先、赤くなる顔をじっくりと観察する佐伯と目があった。
「君の処女、ここで俺に奪われちゃうんだよ」
「っ、さえき、ぶちょ……ッ」
　きゅんっとお腹の中が締め付けられるような感覚があった。
　吐く息が熱い。真っ赤になった頬を佐伯の指が撫で、ゆっくりと顔が近づいてくる。
「それ分かっててここに来たんだ。やっぱりなし、は通用しないよ」
「はっ、ごめ、なさっ……んっ！　んぅっ、は……ぁ、ぶちょっ、ンッ！」

怒ったように目を細められビクリと肩が揺れる。だが謝罪しようと開いた口は、噛み付くような口づけに襲われた。
伸びてきた舌が、奥で縮こまる舌を引き摺り出す。分厚い舌が口内を荒らし、抵抗しようと胸板を押した手には力が入らなかった。
「んっ、ふぅ……んっ、ッっ、ぅっ」
歯列をなぞり、上顎を舐め、舌先を擽る。逃げられないように後頭部を押さえられて、足は情けなくもガクガクと震えてしまっていた。
「っ、はっえ、ぁ、ぶちょっ……ぉっ」
「……すっごい顔してる自覚ある？　あ、もしかしてキスも初めて？」
「ッ！　ぁ、それ、は……」
「へぇ、じゃあ俺が正真正銘君の初めての男になるってわけだ」
口の端から垂れた唾液を佐伯が拭う。ドキドキと胸を高鳴らすこちらとは違い、佐伯は特に何の気持ちも抱いていなさそうだった。
「ッ、ひど、ぃっ、わ、わたし、全部、初めてなのに……っ」
そのあまりの落差に、思わずドンッと厚い胸板を叩いてしまう。だがキスで弱った力では大した威力にもなっていなか

った。叩いた腕を一纏めに掴まれてしまう。
「酷いだなんて心外だなぁ。俺、初めての子には優しくするタイプだよ？」
「っ、部長の、そういうところ、だいっきらいです」
　悔しいのか悲しいのか分からないまま、膜の張った目で佐伯を睨みつける。
「ふぅん、……良いこと教えてあげる。俺はね、そうやって言われると、相手のことぐちゃぐちゃのドロドロにして、俺しか目に入らないようにしてあげたくなるんだよね」
　にやりと佐伯の口角が吊り上がる。反して、全く笑っていない冷たい瞳に、選択を間違ったかもしれないと、そこでようやく気が付いた。

「んんっぅっ、んっ！　ゃあっ♡　ごめっ、なさっ、ぶちょっ、ごめんっ、なさ……ぃいっ！」
　ベッドの上で拘束された身体がびくんびくんと跳ねる。腕は頭の上で手錠に繋がれ、足は潰れたM字のように太ももとふくらはぎをバンドで拘束されていた。
　蜜壺を佐伯の指が優しく、だが確実に快感を与える動きで擦る。最初は一本だけだった指も今では三本に増え、中イきを覚えた膣は何度も無理やり絶頂に押しやられている。
「んぁ！　ゃあっ、とめっ、てっ、またイぐっ……またっ、

イぐ、からぁ……っ！」
　ツンと尖り切った乳首をねっとりと舐められ、開いた手で形を楽しむように揉まれる。自分ではあまり弄ってこなかった場所への愛撫も、時間を掛けられたせいで身体が気持ちいいと覚えてしまった。
「イぐっ、らめ……ッ、イっ――ぐッッ……ぅっっ」
　抵抗できないまま身体を跳ねさせてイく。もう何度絶頂したか分からない。蜜壺からはぷしゅっと軽く粘液が吹き出し、足先が耐えきれないとばかりに丸まる。全身に鳥肌が立っているのに、佐伯はそんなことお構いなしだった。
「あーあ、これで何回目？　セックスしないと、ここから出られないんだよ？　そうやって自分だけ気持ちよくなって終わるつもり？」
　指を引き抜いた佐伯が、ピッと手を振って水滴を飛ばす。刺激のなくなった蜜壺はヒクヒクと何かを求めるように引くついていた。
「っ、すみ、ませ……、ごめんっ、なさい、もっ、挿れてくださぃ……ひっ、く、佐伯ぶちょぉの、ここっ、挿れてっ、くださぃ……ッ」
　腰を振って必死に強請る。これは本気で挿れてほしいわけではなく、この時間を早く終わらせるために必要なことだ。そう言い聞かせて湧き上がる羞恥に耐える。

「うーん、もっと煽るようなおねだりできない？　それじゃ挿れる気になんないなぁ」
「っ！　ひどっ、ひどぃぃっ！　いれてっ、もっ、おわって、よぉ……ッ！」
　恥も外聞もなく泣き叫ぶ。だがそんな様子を見ても、佐伯は面白そうに笑うだけで服を緩めようともしなかった。
「俺が挿れたくなるように、頑張って卑猥な言葉考えな？　その間、頭バカになるくらい気持ちよくしてあげるからさ」
　くすくすと笑った佐伯が体勢をずらす。彼の頭が向かった先は、だらだらと愛液を垂れ流す股の間で。
「ひぁっ！　やっ、やらっ……！　ぶちょっ、なめっ、んぅぅうっ♡　やらぁっ、なめちゃっ、んぅ……ぁあぅっ！」
　まさかと思う間もなかった。
　柔らかく生温かい感触が陰唇に触れ、そのまま溝の間をねっとりと舐めあげる。それは未知の感覚だった。
　どうにか逃げようと暴れるも、拘束されている身体では大した抵抗にもならない。
　逆に怒った佐伯によってクリをぢゅっと強く吸われてしまった。
「ひぎっ♡　ごめっ、ごめなさ……っ、も、にげなぃっ、にげない、ですからっ、クリ、ちゅよぃぃ……っっ♡」
　ぢゅるっ、ぢゅるるっ、ちゅ、ぢゅぅぅっ、とひどい水音

を立ててクリを吸われる。元より弱いクリを、そんなふうにいじめられたらひとたまりもなかった。
「ぃ――ぐぅぅっ……♡　ッッ……っ、ひっ、ぎぃぃっ、イっだ！　イぎっ、ましだぁあッ！」
　強く吸われすぎて口内が真空のような状態になる。その状態でクリに吸い付いたまま、上顎と舌でぷくりと膨れた先端を潰される。容赦のないその愛撫に、目の前がバチバチと激しく弾けた。
「ひっ、ぎ――ッッ……ッぅっ、ぁがっ、ぁ……っ」
「ん、はぁ……もっと可愛く喘げない？　処女にあるまじきひどい声出してるけど」
　誰のせいで、と言いたい口を塞ぐようにピンっとクリを弾かれる。より一層弱々になったクリへの刺激に、耐える間もなく「ぉほっ♡」と声が漏れた。
「ほらそれだって。俺もセックスするなら可愛く喘ぐ子がいいしさぁ」
「ひっ、ひぎっ、しゅみ……ましぇっ、ぁああっ♡　やらっ、クリ、もっ、んぅ、ぐぅぅ……ッぎっ、ぃ！」
　クリの根本を摘みながら先端を柔く甘噛みされる。
　必死に酷い声を抑えようとするも、ダイレクトに響く快感のせいで到底無理だった。
「イぎゅっ……ッ、イぎ……ましゅ、ぅぅ――……ッッ！」

顎を反らせて絶頂する。その間もクリは優しく甘噛みされ続け、新たに蜜壺に指が二本挿入された。ぎゅうぎゅうと締め付ける中を指が掻き分けていく。絶頂の余韻など知らないとばかりに刺激が増え、地に戻れないまままた高みに登らされる。
「ぉっ、……ごっぇ、なしゃ……ゃぁっ、もっ、ぉ、――ッっ、ぃぎゅっ……〜〜ッッ♡」
一瞬意識が飛ぶ。
だがそれを許さないとばかりにクリを強く吸われ、束の間の休息さえ与えられないままに戻ってくる。
ぐちゅぐちゅ、じゅぽっ、ぢゅるるっと卑猥な音で部屋が満ちる。何度もイかされた蜜壺はどろどろふわふわに蕩け、いつ陰茎が挿入されても快感を得られる場所へと変わっていた。
「ぁ……、ぁっ、ひゅっ、ぁ、も、むぃ……ぶちょ、おねがっ、しま……いれっ、て、ここ、いれてっ、くだしゃ……っ」
うわ言のように呟く姿に、ようやく佐伯がクリから顔を離す。その口元は愛液でぬれそぼっていた。
佐伯の指がトントンとGスポットを撫でる。
「ここ、何を挿れてほしいの」
「んぁ、あ……佐伯ぶちょぉ、の挿れて……っ、おねがい、

しま、」
「俺の、なに？　ちゃんと言ってくれないと分かんないよ」
「ッ、ひどっ、いじ、わる……っ、わかってる、のにっ、なんでっ」
「うん？　手マンで気絶するまでイかせてほしいって？」
　笑っていない目で佐伯が言う。今の佐伯なら本気で実行しそうだった。
　慌てて首を横に振り、震える口を開く。初めての行為にしては全てのハードルが高すぎた。
「っ、ここ、わ、わたしの、おまんこ、に……っ、佐伯、ぶちょう、の、お、おちんぽ、いれて、くださぃ……」
　吐き出した言葉は掠れ震えていた。
　中から指を引き抜いた佐伯が「はは、」と笑う。
「おまんこ、は別に言わなくてよかったのに。まっ、いいよ。おまんこに、おちんぽ、挿れてあげる」
「ッ、ぅぅ……ひどぃっ、も、ひどぃ……ぃっ」
　顔を逸らしてひんひん泣く。普段の仕事は優しくて頼りになる部長なのに、こういうことをする時だけ佐伯は意地悪でひどい男になった。
　佐伯がシャツを脱ぎ、スラックスを緩める。下着の中から出てきたのは、大きく張り詰めた陰茎で、その飄々とした表情からは想像もつかないほどに血管を浮き立たせていた。

「ひっ……！」
　思わず悲鳴が上がる。涙で不明瞭な視界でもその凶悪さが分かる。パチパチと瞬きして涙を散らすと、より一層恐ろしいものが目に入った。
「ぁ、ぁの、ぶ、ぶちょぉ……、そ、それ」
「ん？　ああ、ちゃんとゴムはするよ。この新作、使ってみたかったんだよねぇ」
　こちらの動揺などなんのその。ゴムを身に纏わせた陰茎がぴとりと膣口に当てられた。
　捩る身体を、拘束されたままの太ももを押さえられて止められる。
「初めてのちんぽ、存分に味わってね」
「ひぁ♡　ぁ、ぁあっ、ぁ……んっ、ぅ、はぃっ、てぇ……ッ」
　にゅるりと愛液をまとった陰茎がゆっくりと中を割り入ってくる。手マンでどろどろにされたせいか痛みは感じず、多少の圧迫感があるだけだった。
「ぁ、ぁっ、ぁ……ぅっ、まっぇ、まっ、て……ぇ」
　顎が反る。内壁を擦る陰茎は熱く、太ももがピクピクと震える。初めての男の味に、中がきゅんきゅんと吸い付いているのが分かった。
「はっ、中やっば、自分から飲み込んでんじゃん」

とちゅんっと亀頭が子宮口に当たる。途端それまでとは一線を画すような甘く重い快感が全身を走り抜けた。
「ぉあっ♡　ゃらっ、しょこっ、おくらめ……っ、まっへ、まら、うごいちゃ……らめれっ」
舌先が痺れたように言葉が上手く紡げない。
折り曲げていた足のバンドが外され、佐伯の両肩に乗せるように抱えられた。太ももをガッチリと掴む腕が、逃さないと告げてくる。
ぼやけた視界で佐伯を見ると、ちょうど獲物を喰らう獣のように舌舐めずりをしているところだった。
「ひっ、ぁあっ、ぁ、やぁっ、とんとんっ、らぇ……ひぎゅっ、ぅっ♡」
とん、とん、と一定のリズムで子宮を叩かれる。激しい動きはなく、ただ腰を押し付けるだけのそれなのに、与えられる快感は強烈だった。
ガチャガチャと頭の上で拘束具が音を立てる。必死に頭を振って訴えても、佐伯の腰はそんなことお構いなしだった。
「はっ、ポルチオそんな気持ちいい？　中搾り取るみたいに動いてる。ッ、は、これで処女とか、才能あるね」
揶揄うように告げて、佐伯が腰をぐるりと回す。子宮に押し当てたままのそれに、「ぉごっ♡」と足がピンっと伸びた。そのまま絶頂する。目の前がバチバチと弾け、腰から下の感

覚がなくなる。頭の中はふわふわとしており、雲の中を漂っているかのようだった。
「は？　今イった？　俺イくときはちゃんと報告しろって言ったよね」
「ひぎっぃ！　しゅ、しゅみましぇっ……っ、やぁあっ！　イった！　イぎましっ、だぁ……ッ！」
　無報告での絶頂に、佐伯が怒って腰を叩きつける。甘やかすみたいな動きから、叱りつけるような動きに変わり、重く苦しいくらいの快感に襲われた。ふわふわとしていた思考が一気に戻ってくる。
　腰を動かしやすいように膝を折り曲げられ、ばちゅばちゅと勢いよく陰茎が出し入れされている。
「ッ、ぁがっ、イっ、ぎましゅっ！　イぎっ、ま――ッ♡　ッッ、がっ、は……ぁっ、あっ！」
「はっ、そうそう、ちゃんと出来んじゃん」
　褒めるように手が伸びてきて乳首をくにくにと揉まれる。ピンっと尖り切った乳首は、久しぶりの愛撫に嬉しそうに先端を膨らませていた。
「ひっ、ゃらっ、ちくっ、びらめっ！　おくっも、なのにっ、ゃあイぐっ……ッ！」
「ん、すっげえ締め付けてくるくせに乳首嫌なの？　ああ、クリの方がいいってことか」

「ちがっ！　ぁあぁッ♡　やらっ、クリもっ、らめっ……ッ、いたいっ、からぁ……ッ、ぉほっ、イっ、ぐ――ッ♡」
　乳首から離れた指がクリをピンっと弾く。そのままぷるんと揺れた粒を摘み、中の芯をほぐすように強めに捏ねられた。途端汚い声を上げて絶頂する。腹の奥を締め付けるような筋肉の動きに、佐伯が「ぐっ、」と低く呻いた。
「はっ、もっと可愛く喘げないの？　そんなんじゃ、セックスじゃなくて虐められてるんじゃないかって思われちゃうよ？　私たちはちゃんとセックスしてますって、ＡＩに伝えなきゃ、この部屋から出られないよ」
　太ももを強く押さえつけられ、ずるりと陰茎を引き抜きながら佐伯が言う。体勢を整えながらのそれは、今から俺が気持ち良くなるためだけのピストンをするぞ、という合図のようだった。
「ひっ、ぁ、わ、わたしたち、せっくしゅ、してま……す、わ、わたしと、佐伯ぶちょぉで、ちゃんとせっくす、してますっ、お、おまんこ、おちんぽでバチュバチュされてっ、さっきから、んっ、なんかいもっ、イってるだけっ、なんですっ、い、いじめられてる、わけじゃなくっ、て、せっくす、して、気もちぃいだけ、だから、だから、」
　亀頭だけ嵌った結合部に自然と視線が引き寄せられる。はぁはぁと呼吸は荒くなり、もう自分が何を言っているのか分

かっていなかった。
「はは、そこまで言えとは言ってないんだけどなぁ。君、こういうの結構好きでしょ」
「ぁ、ぁっ、ぶちょっ、の、おちんぽ、はいっ、はいっ……てっ、ぇっ、ぁああっ♡」
　佐伯の言葉ももう聞こえない。ばちゅんっと強く亀頭を叩きつけられ、快感が脳に届く前にピストンが開始された。
　ひどい水音がふたりの間で鳴らされる。中の気持ちのいい場所を余すとこなく擦る陰茎に、獣のように嬌声を上げるしかなくなる。
「ひぎぃっ、いっぐ――ッ、ぅ、がはっ……ゃらっ、ぉっ、まだッ、イっ――っぐ、ぅっ、いっで、ぅ……っ、ぉっ」
「っ、はっ、……あー、きもちぃっ、はっ」
　佐伯の顎から汗がぽたりと肌の上に落ちる。ぼんやりとした視界の中で見た佐伯は、気持ちよさそうに目を細めて陰茎での快感に集中しているようだった。
　身体をグッと折り曲げられる。浮いた腰に陰茎が強く叩き付けられ、もう何度イかされたのか分からない。視界の隅で自身の足がピンっと伸びて痙攣しているのが薄っすらと見えた。
「はっ、そろそろ、イきそ……ッ」
「ひっ、ぁがっ、ぁ、イぎゅっ……ッ、イっで、ま……ぉ、

ぁあ♡」
　蜜壺の中で陰茎が膨れたのが分かる。射精すると勘付いた内壁が、搾り取るようにぎゅぅうっと陰茎に吸い付く。
「ッ、は、イく……ッ！」
　一際強く奥に叩き付けられた。そのままビュクッ、ビュクッと陰茎が痙攣する。ゴム越しに熱い精液が吐き出され、その熱を求めるように身体がぶるりと震えた。
「ぉっ、ゃ……らぇ、イっ、ちゃ……――ッッ」
　射精された感覚で甘イきする。その間佐伯は眉間に皺を寄せ、最後の一滴まで吐き出すかのように腰を押し付けていた。
「っ、ぁ、ぁ……っ、ひぅっ……ッ、ぁ」
　ずるりとゆっくり陰茎が引き抜かれる。出て行かないでとばかりに吸い付く内壁のせいで、ゴムが途中で外れてしまった。中に留まったままのゴムを、佐伯がにゅるんっと引き抜く。中にはたっぷりの白濁が溜まっており、それを見た子宮がきゅんっと強く収縮した。
「はー、あっつ、シャワー浴びてぇ」
　快感の余韻に震えるこちらとは違い、腕の拘束を外した佐伯はいつも通りだった。スラックスの前を締め、ペットボトルに残っていた水を煽って棚からタオルを取り出す。敏感になった身体を拭いてくれる手は、存外優しいものだった。
「服は自分で着れる？」

「っ、はい……ありがとうございます」
「ん、俺先戻るけど、君は落ち着いてからでいいからね」
「あ、……はい」
　冷蔵庫からペットボトルを取り出し、サイドデスクに置いてくれる。そのまま扉へと向かう佐伯は、疲労でぐったりしたこちらに付き添ってくれる様子はなさそうだった。
　扉横のタッチパネルが操作される。ピピっと音が鳴り、ロックが無事解除されたようだった。
「じゃあ、そのセックスしてイきまくりましたって顔、どうにかしてから戻りなね」
「ッ！」
　ひらりと手を振り笑いながら佐伯が部屋から出る。去り際の言葉に、カッと頬が熱くなった。
「っ、ほんっと、きらいっ、……だいっきらい！」
　羞恥に染まった声は、相手に届くことなく壁にぶつかって消えていった。

　サンプル終わり